



# ネットワーク型博物館の構想

中国最大の少数民族壮族のほか、<sup>チワン</sup>瑶族、<sup>ヤオ</sup>苗族などの多くの民族が漢族に混じって暮らす広西壮族自治区。民族の伝統文化を紹介しつつ、自治区内に建設中の10の「生態博物館」のワークステーションとして位置づけられている



壮族が行事で銅鼓をたたく場面を再現することで楽器の演奏法を伝える



劉三姐が歌で競う場面の展示。ジオラマ、絵画がたくみに使用されている

銅鼓をかたどった博物館の外観



## 展示の構成

「五彩八桂」展示場は、広西の民族文化の展示で「居住と生産生活」「服飾文化」「民間工芸」「年中行事・慶事と儀礼」の四つのテーマ展示場から成っている。「居住と生産生活」では、山地や田園の生活、水上市・漁民の生活、都市や定期市での交易を紹介している。

「服飾文化」では、服飾・印染・刺繡・織錦が展示されている。「民間工芸」では、作陶、岩画、彫刻、絵画、木工、編織、製紙など。

「年中行事・慶事と儀礼」では春節・中秋節や各民族の重要な年中行事、生育・婚礼・長寿祝いなどの人生儀礼、さらには民間信仰や芸能の展示がされている。

広西では古代の銅鼓が数多く発掘され、広西を代表する文物の一つであるが、「時空を越えて鼓音が響く銅鼓文化」展示では代表的な銅鼓や

俗の展示にも用いられている。都市

居住民が農漁村の生業やふるい伝統を理解するには格好であるが、同時に伝統的な文化の展示に偏りがちな欠点もある。

第二に、少数民族のみならず漢族の展示にも積極的である。たとえば服飾、龍舞、ふるい家具、ふるい街の薬店・布地店・雑貨店などの店舗が復原されている。なお、南寧では二〇〇四年以来、毎年アセアン博覧会が開催されているが、アセアン諸国のコーナーを企画展示で設けるなど関

心の高さが展示にも活かされている。

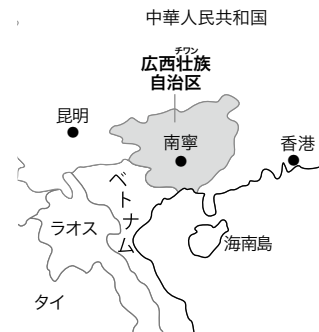
ところで博物館の創設の目的として、展示のみならず、広西で一〇カ所建設が進められているエコ・ミュージアム「生態博物館」とのネットワーク機能がある。それぞれの生態博物館が基地となって、民族文化の保護・研究・伝承・展示を行い、それらの総合的なワークステーションとして位置付けられている。

こうしたネットワーク型博物館という構想は斬新であり、今後の動向に目が離せない。

## 塚田 誠之

民博先端人類科学研究部

文学博士。北海道大学大学院博士後期課程修了の後、一九八八年から民博で中国南部諸民族の歴史民族学的研究に従事。最近、民族の国境を越える移動と交流の研究や壮族社会のなりたちを見直す研究に熱中しています。著書に『壮族文化史研究』（二〇〇〇年、第一書房）など。



現在も使用している場面が展示されている。

## 新たな試み

展示の特徴として、第一に、ジオラマと絵画を組み合わせてさまざまな場面が観衆にわかりやすいよう工夫されている。牛に曳かせるスキヤビーフン搾り機の使い方、京族が独特の網で魚を捕る場面、衣服材料の織り・染めやつや出し、竹編み帽子の編み方、手作業での製紙や鉄鍛冶など、道具の使い方が一日瞭然である。この手法は楽器の演奏や婚礼習



復原された壮族の高床式住居は中に入ることができる